令和８年度（２０２６年度） 第１回熊本市小中学校キャリア教育懇談会　会議録（要約）

１　日時 令和８年（２０２６年）８月２８日（金）１３時３０分～１５時３０分

２　場所 熊本市立総合ビジネス専門学校

３　出席者

熊本大学大学院教育学研究科 准教授　藤井　美保 座長

熊本県立大学 総合管理学部 准教授　小薗　和剛

熊本市青少年健全育成協議会 理事　村上 弥生

公益社団法人ジュニア・アチーブメント日本 特任研究員　松本 高宜

熊本朝日放送（KAB）地域プロモーション局 地域プロモーション部 プロデューサー
小野 史修

肥後銀行　金融資産コンサルティング部　金融資産コンサルティング企画グループ
企画役　園田 智裕

熊本市立帯山中学校保護者　千々岩　慎吾

託麻西小学校保護者　白石 憲宏

熊本市立黒髪小学校 校長　川上 輝美

熊本市立山本小学校 校長　宮村 まり

熊本市桜山中学校 校長　濱田 浩美

【熊本市（事務局）】 教育センター 指導課　雇用対策課

４　配付資料

会次第

事務局説明資料

５　次第

（１）開会

（２）事務局挨拶（遠藤教育長）

（３）座長選出

（４）参加者自己紹介

（５）事務局説明

（６）懇談　　テーマ：発達段階に応じ、効果的に体験活動を取り入れたキャリア教育を目指すために

（７）事務連絡

（８）閉会

６　議事の内容

開会 （事務局）	本日は、ご多用の中ご出席いただき、誠にありがとうございます。 開会に先立ちまして、会場のご案内を申し上げます。お手洗いは会場後方の壁面裏にございます。また、暑い中での開催となっておりますので、体調の優れない方がおられましたら、どうぞご遠慮なくお申し出ください。なお、地震等の緊急事態が発生した場合には、正面側より屋外へ避難していただきますので、係員の案内に従って行動いただきますようお願い申し上げます。 それでは、定刻となりましたので、ただいまより第 1 回熊本市小中学校キャリア教育懇談会を開会いたします。私は、本日の進行を務めます、熊本市教育センター主任指導主事の粟田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。 今回は、熊本市キャリア教育懇談会設置要綱に基づいて開催しております。また、条例第７条の規定により、本懇談会は公開で実施いたします。会議録作成のため、発言内容を記録させていただきますので、あらかじめご了承ください。 また、お手元のタブレットのパスコードは「0000」となっております。操作等でご不明な点がございましたら、係員にお申し付けいただきますようよろしくお願いいたします。 開会にあたりまして、熊本市教育委員会教育長遠藤洋路より委員の皆様にご挨拶を申し上げます。
教育長	【教育長　開会の挨拶】
事務局	【座長選出】 続きまして、懇談会の座長の選出をいたします。懇談の進行役となる座長をお引き受けいただける方がいらっしゃいましたら、お願いいたします。特にいらっしゃらないようですので、事務局案として事前にお願いしております、熊本大学大学院教育学研究科准教授の藤井美保先生に座長をお願いしたいと存じますが、皆様いかがでしょうか。 （異議なし） ありがとうございます。それでは、藤井先生、どうぞよろしくお願いいたします。
藤井　座長	皆様、熊本大学の藤井でございます。これから 3 回ほどご一緒させていただくことになります。どうぞよろしくお願いいたします。それでは、着

	席して進行させていただきます。 懇談に入る前に、本日初めてお会いする方もたくさんいらっしゃいますので、最初に簡単な自己紹介をお願いしたいと思います。お一人 1 分程度で、お名前とご所属をご紹介いただければと思います。なお、皆様がそれぞれどのような取組や活動をされているのかについては、この後、お一人 5 分程度でお話しいただく予定としております。まずは 1 分程度で自己紹介をお願いいたします。
小薗　様	皆さん、こんにちは。着座にて失礼いたします。 熊本県立大学総合管理学部で情報分野を専門としております、小薗和剛と申します。本日はよろしくお願いいたします。 私自身は情報を専門としており、特に情報教育や ICT の活用等に関心を持っております。また、地域活動にも携わっているほか、熊本市においてはタブレット端末の活用に関する教育の検討にも関わらせていただいております。 本日は、私の専門分野とは少し異なる視点や領域のお話も多く伺えるのではないかと思っておりますので、皆様からさまざまなことを学ばせていただきたいと考えております。 どうぞよろしくお願いいたします。
村上　様	改めまして、こんにちは。 熊本市青少年健全育成協議会から参りました、村上弥生と申します。よろしくお願いいたします。 私は、青少年健全育成協議会に携わって 8 年ほどになります。それ以前からも同じ組織で活動に関わっており、一貫して子どもたちの健全育成をテーマに取り組んでまいりました。 日頃から、子どもたちの成長につながるような体験や学びの機会をどのように提供できるか、また、将来社会に出ていく子どもたちのためにどのような支援や環境づくりができるかといったことを考えながら活動しております。 本日は貴重な機会をいただいておりますので、皆様のお話を伺いながらしっかりと勉強させていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。
松本　様	皆さん、こんにちは。公益社団法人ジュニア・アチーブメント日本で、経済・金融教育プログラムを全国の自治体や学校に提供する業務に携わって

	おります、松本高宜と申します。現在は九州地区を担当しております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。 私はもともと京都市で小学校教員をしておりました。その後、教育委員会においてキャリア担当として勤務し、教育プログラムの開発や教育内容に関する業務に携わってまいりました。その後、大学での勤務を経て退職し、現在はジュニア・アチーブメント日本の職員として活動しております。 これまで全国各地で金融教育やキャリア教育の実践に関わってまいりましたので、その中で得た知見や事例などを皆様と共有し、少しでもお役に立てればと考えております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。
小野　様	熊本朝日放送（KAB）地域プロモーション局の小野史修と申します。よろしくお願いいたします。 現在、地域プロモーションに関する業務を担当しており、その中で地域連携や産学官連携に関わる事業の企画・運営・実施に携わっております。 私は「つなぐプロジェクト」という取組を中心に活動しております。このプロジェクトでは、単に企画を実施するだけではなく、人と人、組織と組織、あるいは地域と地域をつなぐことでどのような新しい価値や可能性が生まれるのかを大切にしています。そうした思いから、「つなぐプロジェクト」という名称を付けています。 本日は、既にご一緒したことのある方もいらっしゃいますが、私自身も皆様から多くのことを学ばせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。
園田　様	皆様、初めまして。肥後銀行の園田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私は現在、金融資産コンサルティング部に所属しております。当部署では、投資信託や保険商品、国債などの金融商品に関する企画や推進を行い、営業店でのお客様対応を支援する業務を担当しております。 本日、私の隣におります栫も担当しておりますが、肥後銀行では金融教育にも力を入れて取り組んでおります。小・中・高校生を対象に、職員が講師となって学校へ出向き、金融教育やキャリア教育に関する授業を実施しております。 また、ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、TSMC 進出に伴う地域振興の取組や、地域活性化に関するさまざまな事業にも関わっております。銀行としての金融サービスにとどまらず、地域に根差した企業として幅広い活動を行っております。本日は、そのような経験や取組についても共有させていただきながら、私自身も皆様から多くのことを学ばせていた

	だきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。
千々岩　様	こんにちは。熊本市 PTA 協議会を代表して参りました、帯山中学校 PTA 会長の千々岩慎吾と申します。どうぞよろしくお願いいたします。キャリア教育というテーマにつきましては、子どもたちに「働くこと」とは何かをどのように伝えていくのか、また学校や家庭、地域がどのように関わっていくべきなのかということに関心を持っております。 本日は皆様のお話を伺いながら、しっかりと学ばせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。
白石　様	保護者の代表として、託麻西小学校から参りました白石憲宏と申します。よろしくお願いいたします。私は現在、PTA 会長などの役職には就いておりませんが、保護者の立場から参加させていただいております。 これまで私立中高一貫校で教員として勤務し、昨年 3 月に退職いたしました。現在は個人で事業を営んでおります。学校現場では、進路指導やキャリア教育に携わるとともに、職場体験学習の実施などにも関わってまいりました。そのため、学校教育の現場を知る立場である一方、現在は地域や民間企業に関わる立場にもあり、さまざまな視点から子どもたちの成長を考える機会をいただいております。本日は、保護者としての視点に加え、元教員、そして民間事業者としての視点も踏まえながら、皆様と前向きな意見交換ができればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。
川上　様	皆さん、こんにちは。熊本市立黒髪小学校長の川上輝美と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私は熊本市の小学校に勤務しておりますが、これまで小学校と中学校の両方で勤務した経験があります。 また、キャリア教育に関する取組にも携わってまいりました。中学校勤務時には、文部科学省のキャリア教育関連事業を担当した経験もあり、そのような経緯から今回この場に参加させていただいているのではないかと思っております。 本日は、学校現場での実践や取組についてもご紹介しながら、皆様と意見交換をさせていただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。
宮村　様	こんにちは。熊本市立山本小学校長の宮村まりと申します。どうぞよろしくお願いいたします。

	山本小学校は植木町にあります。私はこれまで、教諭時代から管理職となった現在まで、幼稚園と小学校の両方に勤務してまいりました。幼稚園と小学校を行き来しながら経験を積み、それぞれの校種の教育に携わってきたところです。本日のテーマは小・中学校におけるキャリア教育ですが、その前段階である幼児期のキャリア教育についても少しお話しできればと考えております。 また、これまで生活科や総合的な学習の時間に関わる業務も担当してまいりましたので、そのような視点からも意見を述べさせていただければと思っております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。
濱田　様	皆さん、こんにちは。熊本市立桜山中学校長の濱田浩美と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私は本年 4 月から桜山中学校に勤務しております。 桜山中学校は、市内でも比較的小規模な学校で、生徒数は１８０人に満たない程度、各学年２学級の体制で教育活動を行っております。小規模校ではありますが、生徒たちは非常に落ち着いており、地域とのつながりも深い学校です。私自身、地域のさまざまな会合や行事に参加する機会がありますが、地域の皆様が学校や子どもたちを温かく支えてくださっていることを日々実感しております。地域との結び付きが強く、地域の方々の力に支えられながら教育活動を進めることができている学校だと感じています。 本日は、そうした学校や地域の実情も踏まえながら参加させていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。
藤井座長	先ほどは皆様に自己紹介をお願いしながら、私自身の紹介をしておりませんでしたので、最後に簡単に自己紹介をさせていただきます。熊本大学大学院教育学研究科の藤井美保と申します。専門は教育社会学です。 教育社会学と申し上げると、「社会教育のご専門ですか」と尋ねられることがよくありますが、実際には少し異なる分野です。教育に関わるさまざまな現象を社会学的な視点から捉え、分析することを主な研究テーマとしております。 今回、このキャリア教育懇談会のお話をいただいた際には、「なぜ私が声をかけていただいたのだろう」と少し不思議に感じました。と言いますのも、私自身がキャリア教育を専門に研究しているわけではないからです。現在は、学校と家庭の連携や、親教育、あるいは家族学習といった分野を中心に研究しております。また、家庭や地域と学校との関わりについても

	関心を持って取り組んでおります。 したがいまして、この会では専門的な立場からというよりも、皆様のご意見やご経験をしっかり伺いながら、円滑な議論の進行に努めることが私の役割だと考えております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。 それでは、皆様からご意見を伺う前に、まず事務局から資料に基づいて説明をお願いしたいと思います。先ほどご案内もありましたが、本日は事務局において各種資料や説明内容をご準備いただいております。 まずは事務局から説明をお願いいたします。
事務局	【事務局説明】
藤井座長	ありがとうございました。ただいま事務局から、多方面にわたる重要な内容についてご説明いただきました。まず、今のご説明について、もう少し詳しく知りたい点や確認したい点がございましたら、ご質問をお受けしたいと思います。いかがでしょうか。 （質問なし） よろしいでしょうか。特にご質問がないようですので、本日の議題に入りたいと思います。本日のテーマは、「発達段階に応じ、効果的に体験活動を取り入れたキャリア教育を目指すために」です。 この懇談会は、何らかの結論を取りまとめることを目的とした場ではなく、熊本市の現状や課題を踏まえながら、それぞれのお立場から率直なご意見やご経験をお話しいただく場となっております。どうぞよろしくお願いいたします。 さて、テーマである「発達段階に応じた効果的な体験活動を取り入れたキャリア教育」について議論を進める前に、まずは参加者の皆様の実践や、それぞれの現場で感じておられる課題について共有する時間を設けたいと思います。 学校での取組はもちろんのこと、企業や関係団体における取組も含めて、子どもたちの学びや成長のために、どのようなことを大切にしているのか、どのような工夫を行っているのかについてご紹介いただければと思います。また、それぞれの立場から見える課題や今後の展望などについてもお話しいただければ幸いです。 時間の都合もございますので、先ほどもお伝えしましたとおり、お一人５分程度を目安にご発言をお願いいたします。それでは、順番にお話を伺ってまいりたいと思います。まずは学校現場の取組からお聞きしたいと思いますので、学校関係の委員の皆様からご発言をお願いいたします。

濱田　様	桜山中学校の濱田です。中学校の立場から、特に職場体験学習である「ナイストライ」について、日頃感じていることをお話ししたいと思います。 まず、受入事業所の確保についてです。小学校では校区内での体験活動が中心となりますし、高校生になると行動範囲も広がりますが、中学生はその中間に位置しています。そのため、安全面や学校として管理が行き届く範囲を考慮すると、活動できる場所に一定の制約があります。 また、事業所によっては交通費等の費用が発生する場合もあり、特定の生徒だけが負担を強いられることがないよう配慮する必要があります。こうした事情から、どうしても学校周辺の事業所が中心となり、体験できる業種が限られてしまう現状があります。 そのため、生徒たちが希望する職種や業種を必ずしも体験できるわけではありません。学校側が開拓した受入事業所を提示し、その中から希望を取ったうえで、各事業所の受入可能人数に応じて調整を行っているのが実態です。結果として、生徒の希望と体験内容が完全に一致しない場合もあり、その点は課題の一つだと感じています。 一方で、新たな事業所を開拓することも容易ではありません。教職員が地域の事業所を訪問したり、受入れの相談を行ったりしながら信頼関係を築いていく必要がありますが、どの事業所に依頼するかの判断にも慎重さが求められます。さらに、事前打合せや日程調整、計画作成など、多くの準備業務が必要となります。しかし、教員は日常の授業や生徒指導を行いながらこれらの業務を進めなければならず、十分な時間を確保することが難しい状況です。そのため、新規開拓は比較的時間の取りやすい夏季休業中に行い、職場体験学習は 2 学期に実施するというケースも少なくありません。ただし、2 学期の初めは暑さによる熱中症への配慮も必要となるため、実施時期についてもさまざまな課題があります。 このように、学校と地域や事業所との連携は非常に重要ですが、そのためには訪問や連絡調整など多くの時間と労力を要します。教員が日常業務と並行して対応するには負担が大きく、結果として従来からお世話になっている事業所に継続してお願いする形になりがちです。 受入事業所の確保や連携体制の構築が、中学校における職場体験学習の大きな課題の一つであると感じています。以上です。
宮村　様	続けてお話しさせていただきます。小学校の場合は、特定の職業を体験する機会はそれほど多くありません。社会科では農業や工業、商業などについて学習しますが、生活科や総合的な学習の時間、さまざまな教育活動においては、まず子どもたちの身近なところから学びを広げていくことを大

	切にしています。 山本小学校は農業に携わっているご家庭が多い地域にありますので、低学年では、まず保護者の仕事について知る学習から始めています。子どもたちは、お父さんやお母さんを家族としてだけでなく、「働く人」として捉え直し、仕事への理解を深めていきます。 その後、少しずつ学びの範囲を広げながら、地域で働くさまざまな方々との出会いを通して学習を進めています。例えば、農業に携わる方や JA の職員の方などからお話を伺う機会を設けています。 特に総合的な学習の時間では、学習内容の自由度が高いため、子どもたちが興味や関心を持ったことを大切にしながら学習を展開しています。例えば、子どもたちが銀行の仕事に興味を持った場合には、教職員が関係機関と連絡を取り、学びにつながる活動を計画するといった形で進めています。 このように、小学校ではあらかじめ特定の職業体験を毎年計画的に実施するというよりも、子どもたちの思いや願いをもとに活動を発展させていくことが多くなっています。そのため、学習計画の調整や関係機関との連携については、学級担任や学年担当、管理職などが協力しながら進めています。 また、働くことへの興味や関心を育てる場面は、必ずしも特別な学習活動に限られるものではありません。例えば、動物園へ見学に行った際に、花壇の花を見て「誰が植えたのだろう」、あるいは施設がきれいに保たれていることに気付き、「誰が掃除をしているのだろう」と問いかけることで、子どもたちは日常生活の中に多くの働く人々がいることに気付きます。 そのような気付きを積み重ねながら、身近な社会への関心を高め、さらに総合的な学習の時間などにつなげていくことを大切にしています。 一方で、課題もあります。子どもたちの興味や関心に応じて学習を展開するため、同じ内容を毎年継続的に実施することが難しい場合があります。また、校外学習を行う際には、移動手段や費用の確保などの課題もあります。 そのような中、昨年度、熊本市が実施した企業と学校との交流会に参加する機会がありました。多くの企業の皆様と学校関係者が意見交換を行い、連携の可能性について話し合う場となりました。 学校の教職員は学校という環境の中で働いているため、どうしても視野が限定されることがあります。しかし、その交流会を通して、地域には子どもたちの学びを応援してくださる企業や団体が数多く存在することを知ることができました。そうした出会いをきっかけとして、学校の教育活動

	の幅が広がっていく可能性を感じています。以上です。
川上　様	小学校の立場からお話しします。キャリア教育というと、将来の職業選択や職場体験をイメージされることが多いと思います。しかし、小学校段階では、自分は誰かの役に立つ存在であるということを実感できる小さな経験を積み重ねていくことが大切ではないかと考えています。 例えば、日直や係活動なども重要な体験活動の一つです。子どもたちは役割を任され、その役割を果たすことで、「誰かの役に立った」「みんなのために働くことができた」という喜びを感じます。そうした経験を通して、働くことの意味や楽しさを少しずつ学んでいくことができるのではないかと思います。 本校の取組の一つに、縦割り班活動があります。黒髪小学校では、1 年生から 6 年生までで構成する縦割り班を 16 から 17 グループ程度編成しています。この活動では、掃除などの作業ではなく、一緒に遊ぶことを中心に取り組んでいます。活動内容の企画や準備、運営はすべて 6 年生が担当します。 6 年生にとっては、「小さい学年の子どもたちが楽しめるためにはどうしたらよいか」「この説明で伝わるだろうか」と考えながら活動することを通して、思いやりや配慮の心を育む機会となっています。 一方、下級生にとっては、「自分もあんなお兄さん、お姉さんになりたい」という憧れを持つ機会になります。数年後の自分の姿を具体的にイメージすることができ、それもキャリア形成の土台の一つになっているのではないかと感じています。 また、本校区は地域の皆様の活動も大変活発です。青少年健全育成協議会をはじめ、地域の団体の方々にはさまざまな形で子どもたちを支えていただいています。例えば、夏休みには地域ぐるみの体験活動や交流活動を企画していただいたり、低学年向けに自然体験や遊びを取り入れた活動を行っていただいたりしています。 子どもたちはその中で、地域には自分たちを見守り、支えてくれている大人がたくさんいることを実感します。こうした地域との関わりも、将来の社会とのつながりを考える上で大切な経験になっているのではないかと思います。 ただし、大切なのは活動をやりっぱなしにしないことだと思います。縦割り班活動や係活動、地域活動なども、「楽しかったね」「よく頑張ったね」で終わるだけでは十分ではありません。例えば、「あなたがこうしてくれたおかげで、1 年生が安心して活動できたね」「みんなが楽しく過ごせた

	のはあなたの工夫があったからだね」といったように、大人がその意味や価値を言葉にして伝えることが重要だと思います。 子どもたちの経験に対して、大人が丁寧に意味付けや価値付けを行うことで、その活動が単なる経験ではなく、キャリア教育としての学びにつながっていくのではないかと考えています。以上です。
白石　様	それでは、お話しさせていただきます。 私は現在、小学 2 年生の娘を持つ保護者という立場と、以前、私立中学校・高等学校で教員をしていた立場、そして現在は民間で教育事業を行っている立場の三つの視点からお話ししたいと思います。 まず小学校段階についてですが、子どもたちには「仕事に憧れること」や「働くことの楽しさを感じること」を大切にしてほしいと思っています。娘の学年でも、工場見学を通して実際の仕事の様子を見る機会がありました。また、私自身が学習塾を開設した際には、電気工事業者や内装業者の方々が作業される様子を娘や地域の子どもたちに見てもらいました。実際に体験するまでではなくても、働く人の姿を目にすることは、子どもたちにとって大変意義があると感じています。 一方で、中学校では職場体験学習であるナイストライに携わってきました。職場体験の意義は非常に大きいと感じていますが、実施に当たっては大変な苦労があります。 勤務していた学校では、1 学年 80 人程度の生徒の職場体験を担当者が中心となって調整していました。特に私立学校の場合は、通学範囲が広く、生徒の居住地もさまざまであるため、受入事業所の確保には多くの労力を要します。事業所の開拓や調整は容易ではなく、多くの学校が同様の課題を抱えているのではないかと感じています。 しかし、職場体験は単に体験して終わるものではなく、その仕事に携わる方々の思いや働く意義について考える機会となるため、大変重要な取組だと思っています。そのため、学校だけでなく、保護者や地域、民間企業などが協力しながら支援していく仕組みが必要ではないかと感じています。 また、高校段階になると、職場体験だけでなく、探究活動や商品開発、企業との連携活動など、より発展的な学習が可能になります。実際に企業と連携した商品開発や、起業体験に取り組む学校もあります。 さらに高校 3 年生になると、進学や就職に加え、経済的な視点も踏まえながら将来を考える必要があります。そのため、金融教育を通して進路選択や人生設計について考える機会も重要であると考えています。 現在、私が運営する学習塾でも大学生のインターンシップや教育実習に類

	する学びの機会を受け入れています。学生たちは現場で実際の教育活動を経験しながら学んでいます。 このように、キャリア教育は小・中・高校だけで完結するものではなく、その先の大学や社会人になってからの学びやキャリア形成にもつながるものであり、生涯を通じて考えていくべきテーマではないかと思っています。以上です。
千々岩　様	それでは、私からお話しさせていただきます。私は PTA 活動に長く関わっており、帯山中学校 PTA 会長として 4 年間活動してまいりました。また、昨年度からは熊本市 PTA 協議会の活動にも携わっております。 PTA 活動を通して感じていることは、さまざまな職業や立場の方々と出会うことができる点が非常に大きな魅力だということです。保護者には多様な職業に就いている方がおられ、それぞれの経験や考え方を子どもたちに伝えることもできると感じています。 昨年度、熊本市 PTA 協議会の研修活動において研究大会を実施しました。従来は講演を中心とした内容でしたが、昨年度は「楽しく学べる研究大会」をテーマとし、参加型の授業形式で実施しました。 内容としては、防災教育、金融教育、さらには非行防止や犯罪防止に関する学習などを取り上げました。こうした学びも広い意味でのキャリア教育につながるものではないかと考えています。 実際に参加者からも好評をいただき、「体験しながら学ぶこと」の大切さを改めて感じる機会となりました。 また、仕事を通して若い世代と接する機会もありますが、社会に出てから求められる力として、コミュニケーション能力の重要性を強く感じています。特別な能力だけでなく、挨拶や返事、人との関わり方といった基本的な力が、多様な世代や立場の方々と働いていく上で非常に大切だと感じています。 保護者として子どもにも伝えていることですが、「働く」ということは、自分のためだけでなく、人の役に立つことでもあると思っています。 例えば、一つの製品が完成するまでには、多くの人が関わっています。原材料を作る人、運ぶ人、加工する人、販売する人など、多くの方々の仕事がつながることで社会が成り立っています。 そのように、一つの仕事の背景には多くの人々の支えや協力があることを子どもたちに伝えながら、人のために力を発揮できる人になってほしいと考えています。以上です。

園田　様	それでは、肥後銀行の取組についてご紹介いたします。 まず私自身の経験からお話ししますと、銀行に勤務して 21 年になります。長女が中学 1 年生の頃、学校から「保護者の仕事について話をしていただける方はいませんか」という依頼があり、キャリア教育の一環として子どもたちの前で仕事の話をしたことがありました。 その際、他にも大学教員や地域の事業者の方などが参加されていましたが、改めて自分の仕事について子どもたちに説明する機会をいただきました。 また、子どもが中学校で職場体験学習に参加した際、「銀行はどんな仕事をしているのか」と尋ねられたことがありました。普段当たり前に行っている仕事であっても、子どもたちにわかりやすく伝えることの難しさを感じた経験でした。キャリア教育の出発点は、まず身近な大人である保護者の働く姿を知ることではないかと感じています。 一方で、金融教育に携わる中では難しさも感じています。例えば、「お父さんはいくら給料をもらっているのか」といった質問になると、家庭の事情もあり、なかなか率直には答えにくい部分があります。金融教育や職業理解は、年齢が上がるほど現実的な内容にも関わってくるため、その伝え方には工夫が必要だと感じています。 続いて、肥後銀行の金融教育の取組についてご紹介します。 当行では、小学校・中学校・高校・大学に至るまで、さまざまな世代を対象に金融教育を実施しています。昨年度も多くの学校で出前授業を行いました。また、財務局や日本銀行など関係機関とも連携しながら、高校生向けの金融教育にも取り組んでいます。 特に大津町の小・中学校では、熊本市教育委員会からの相談を受け、地域課題や将来のまちづくりも見据えた金融教育プログラムを実施しました。人口減少や少子高齢化が進む中で、子どもたちが地域の将来や自分自身のキャリアについて考える機会をつくることが目的です。プログラムは小学校高学年から中学校までを見通した継続的な内容となっており、単発の授業ではなく、発達段階に応じて学びを積み重ねていく構成としています。 このような取組を進める中で感じるのは、学校、自治体、企業が連携することの重要性です。一方で、継続的に実施していくためには、人材や予算の確保などの課題もあります。 単発の取組ではなく、地域全体で継続して子どもたちの学びを支える仕組みづくりが必要であると考えています。以上です。
小野　様	それでは、お話しさせていただきます。テレビ局というと華やかな仕事を

	イメージされるかもしれませんが、私自身は地域と学校、企業や団体をつなぎ、新たな価値を生み出すことを目的としたプロジェクトに取り組んでおります。今回、「発達段階に応じ、効果的に体験活動を取り入れたキャリア教育を目指すために」というテーマについて考える中で、私はキャリア教育における体験活動の意義を、4 つの言葉で整理できるのではないかと考えました。 それは、「出会う」「気づく」「選ぶ」「挑戦する」の 4 段階です。もちろん学年ごとに明確に区切られるものではありませんが、子どもたちの成長に応じて体験の意味が深まっていく過程を表していると考えています。 まず、小学生の時期に最も大切なのは「出会うこと」だと思います。私は以前、子どもたちが地域の人々に取材し、その内容を新聞やラジオ番組にまとめる活動に携わっていました。その中で感じたのは、特定の職業について詳しく学ぶことよりも、「世の中にはこんな仕事がある」「こんな生き方がある」ということを知ることが非常に重要だということです。 現在関わっている体験型イベントでも、本物の仕事や地域で働く方々との出会いを重視しています。教室で説明を聞くだけでなく、実際に体験することで、子どもたちの心にはより強く残ると感じています。 次の段階が「気づく」です。中学生になると、体験を通して、自分は何が好きなのか、何に興味があるのか、どのようなことにやりがいを感じるのかを考えるようになります。 現在、県内の高校の学びを小・中学生に紹介する取組にも関わっていますが、学校案内を見るだけでは得られない気付きが多くあります。実際に高校生が活動している姿を見ることで、「こんな学び方があるのか」「自分もやってみたい」と感じる子どもたちが多くいます。その際に重要なのは、大人が説明すること以上に、少し年上の先輩たちの存在です。年齢の近い先輩が楽しそうに学んでいる姿は、小・中学生に大きな影響を与えると感じています。 さらにその先は「選ぶ」の段階です。例えば、高森高校マンガ学科の取材を通して感じたことですが、生徒たちはプロの漫画家や編集者から学びながら、自分の進みたい道を真剣に考えるようになります。好きなことを仕事にするためには何が必要なのか、自分は本当にその道に進みたいのかといったことを、体験を通して考え、選択していきます。 そして最後が「挑戦する」です。自分で作品をつくり、人に見てもらい、評価を受ける。必ずしも良い評価ばかりではありませんが、その経験を通して改善し、再び挑戦する力が育まれます。 私は、キャリア教育で最も大切なのは職業を知ることだけではなく、自分

	で選び、自分で行動し、失敗からも学びながら挑戦を続ける力を育てることだと考えています。体験活動は単なる一回限りのイベントで終わるものではなく、次の学びへとつながるものでなければなりません。「出会う」「気づく」「選ぶ」「挑戦する」という流れを意識しながら、発達段階に応じたキャリア教育を考えていくことが重要ではないかと思います。以上です。
松本　様	皆さん、こんにちは。ジュニア・アチーブメント日本の松本です。 本日は、先生方から具体的な事例が多く紹介されていましたので、私はどちらかというとキャリア教育の基本的なお話をさせていただこうと思っていました。しかし、せっかく動画も用意しておりますので、まずは私たちの団体の取組をご紹介したいと思います。 簡単に団体の説明をしますと、私たちは小学生から高校生までを対象としたさまざまな教育プログラムを提供しています。学校からの依頼だけでなく、教育委員会や企業からの要請を受けて実施することもあります。 当法人は公益社団法人であり、企業からの寄付金をもとにプログラムの開発・提供を行っています。そのため、学校や児童生徒から受講料等をいただくことなく実施しています。 まず、小学生向けの代表的なプログラムとして「スチューデントシティ」を紹介します。キッザニアとよく似ていると言われますが、決定的に異なる点があります。 現在、このプログラムは宮城県仙台市、福島県いわき市、東京都品川区、そして福岡県飯塚市などで実施されています。 スチューデントシティでは、小学生が一つの街の中で、サービスや商品を提供する側と受ける側の両方を体験しながら、経済の仕組みを学びます。大きな特徴は、当日の体験だけでなく、学校において担任の先生による事前学習を行うことです。 また、単なる職業体験ではなく、企業活動そのものを体験します。例えば、企業間取引（BtoB）の仕組みを学び、営業活動や契約書の作成、請求書の発行なども経験します。こうした内容は事前学習では行わず、当日の体験を通して学ぶ構成になっています。 このような体験を通して、子どもたちは経済の仕組みへの理解を深めるとともに、自分の将来像について考える機会を得ています。 次に、中学生向けの金融経済教育プログラムをご紹介します。 このプログラムでは、人生や生活に関わるさまざまな選択と意思決定について学びます。中学 1 年生から 3 年生を対象としており、将来の収入や

	支出を考えながら家計設計を行います。生徒は自ら支出計画を立て、それが収入の範囲内に収まっているかを確認します。また、企業ブースを回りながら、消費や金融に関するクイズなどに取り組み、学びを深めます。 こうした活動を通して、生徒たちは自分の将来像を具体的に描きながら、計画的にお金を管理する力や意思決定する力を身に付けていきます。 本日ご紹介した内容は、私たちの団体が実施している代表的なプログラムの一部です。 先ほど先生方からもお話がありましたが、学校で継続的にこうした取組を進めるためには、企業との連携や連絡調整など、多くの課題があります。私自身も現場で実践してきましたので、その大変さはよく理解しています。授業を行いながら企業との調整を進めることは大きな負担になりますし、協力企業の状況によっては事業の継続が難しくなることもあります。 私が京都市で勤務していた頃、当時の教育長から「こうしたプログラムであれば継続的に実施できるのではないか」という話があり、そのことが現在の取組につながっています。 本日は一つの事例としてご紹介させていただきました。少しでも皆様の参考になれば幸いです。ありがとうございました。
村上　様	青少協では「中学生地域交流事業」に取り組んでおります。地域によって名称等は異なるかもしれませんが、中学生が地域の方々と一緒に活動し、企画から運営まで主体的に関わる取組です。 以前は、大人が準備した内容に沿って子どもたちが活動する場面が多く、「これをやればよい」という形になりがちでした。そのことに対して、「本当に子どもたちの学びにつながっているのだろうか」と感じることがありました。 そこで、できるだけ企画の段階から生徒自身に任せるようにしました。たとえ失敗したとしても、大人が支えるのでまずはやってみようという考え方です。議案作成や会議の運営、参加者への連絡や出欠確認なども含め、生徒たちが主体となって取り組めるようにしました。生徒会の生徒たちが中心になりますが、最初は大人の前で意見を言うことをためらう姿も見られました。しかし、「間違っていても構わない」「まずは自分の考えを伝えてみよう」と声をかけ続けることで、徐々に自分の意見を発言できるようになりました。 その結果、「こういう方法もあると思います」「間違っているかもしれませんが、こんな考え方はどうでしょうか」といった発言が増え、自ら考えて提案する姿が見られるようになりました。

	また、地域の自治会の皆様からご支援をいただきながら活動を進めていますが、以前は大人が行っていた相談や交渉についても、生徒たち自身が関わるようになってきています。 私は、キャリア教育において大切なことは、「失敗しても大丈夫だと感じながら挑戦できる経験」をどれだけ積ませることができるかということだと思っています。周囲の大人が支えながら、安心して挑戦できる環境をつくることが重要ではないかと考えています。 また、少し視点を変えてお話ししますと、私は個人的に面接指導などを行う機会があります。その中で感じるのは、子どもたちが自分の経験や感情を言葉にすることが意外に難しいということです。 「楽しかった」「よかった」「またやりたいと思った」という感想は出てくるのですが、なぜそう感じたのか、自分にどのような変化があったのかを具体的に説明できないことが少なくありません。 そこで私は、体験活動の前に「何のために取り組むのか」「どのような気持ちになりたいのか」ということを考えさせるようにしています。そして体験後には、「何が難しかったのか」「何がうれしかったのか」「どのような気持ちになったのか」を整理する時間を設けています。 その際、いきなり文章でまとめさせるのではなく、絵や色、キーワードなどを使いながら自分の気持ちを表現させることもあります。 例えば、「なぜこの色を選んだのか」「どのような思いがあったのか」と問いかけることで、自分自身の感情を見つめ直すことができます。そうした積み重ねによって、自分は何が好きなのか、どのようなことに価値を感じるのかという自己理解につながっていきます。 キャリア教育は職業選択だけではなく、自分の存在価値や将来の生き方について考える教育でもあると思います。そのため、体験したことを振り返り、自分の言葉で整理する過程が非常に重要ではないかと考えています。 最後になりますが、学校と地域、学校と企業との連携は非常に重要である一方で、学校だけで進めるには難しい部分もあります。そのような際には、青少年健全育成協議会をはじめとした地域団体の力も積極的に活用していただければと思います。 地域、家庭、学校が連携しながら子どもたちの成長を支えていくことが、よりよいキャリア教育につながるのではないかと考えています。以上です。
小薗　様	それでは、私からお話しさせていただきます。これまで皆様から、それぞれのお立場での経験や具体的な実践事例をご紹介いただきました。私は少

	し抽象的な話になるかもしれませんが、キャリア教育を取り巻く環境や今後の方向性について考えていることをお話ししたいと思います。 まず、教育長からもお話がありましたように、現在は社会そのものが大きく変化している時代です。特に AI の急速な進展は、今後の働き方や職業の在り方に大きな影響を与えると考えられています。 AI の発展によって、一部では将来的な雇用の変化や就職環境の厳しさが指摘されており、特に知的労働の分野においては既に大きな影響が出始めているという見方もあります。こうした変化は、数年後には日本にもさらに広がっていく可能性があります。 また、近年は「フィジカル AI」と呼ばれる分野も注目されています。これは、物理的な機器やロボット、自動運転技術などに AI を活用するもので、現実社会における仕事や産業構造そのものを変える可能性を持っています。 今後、どのような仕事が残り、どのような仕事が生まれていくのかについては引き続き注視していく必要がありますが、社会の変化に対応できる力を育てることが一層重要になってくると感じています。企業の人材採用の在り方も変化しつつあります。従来のように新卒採用を前提に長期間かけて育成するモデルから、必要な能力を持つ人材を必要な人数だけ採用するモデルへ移行する企業も増えてきています。 また、AI の活用を前提とした業務設計も進んでおり、これまでとは異なる能力や資質が求められる社会になりつつあります。 そのような状況を踏まえると、社会に出るまでの学びをどのように設計していくかということは、今後ますます重要な課題になると考えています。 次に、キャリア教育を誰が担うのかという点についてです。 小学校、中学校、高校、大学、それぞれに役割がありますが、ともすると「それは自分たちの役割ではない」と考えてしまう場面もあるかもしれません。 しかし、キャリア教育は特定の校種や機関だけで完結するものではありません。それぞれの立場が果たすべき役割を整理しながら、連続した学びとして捉えていく必要があるのではないかと考えています。 また、個人的には、子どもたちが将来のキャリアを実現する上で、いくつかの「壁」が存在すると考えています。 一つ目は、本人の希望や進路選択に対する周囲の理解という壁です。 二つ目は、体験活動や学習機会の有無といった環境の壁です。 三つ目は、将来を考えるための情報へのアクセスという情報の壁です。 四つ目は、知識や技能の壁です。

	そして五つ目は、社会情勢や雇用環境といった現実の壁です。 キャリア教育においては、子どもたちがこうした壁をどのように乗り越えていくか、そのためにどのような支援ができるかを考える必要があると思っています。 また、学校現場では先生方の負担も非常に大きくなっています。先ほどからもお話がありましたが、学校だけでキャリア教育を充実させていくことには限界があります。 そのため、地域や企業、大学、関係団体などがどのように関わり、それぞれがどのような役割を担うのかを整理していくことが重要ではないかと感じています。 最後に、いくつかキーワードとして挙げたいと思います。 一つは、「社会教育力の充実と活用」です。学校だけではなく、地域や企業など社会全体で子どもたちを育てる視点が必要です。その際、協力する側にも意義やメリットが感じられる仕組みを考えていく必要があると思います。 二つ目は、「学びの社会実装」です。学校で学んだ知識や技能を社会の中でどう活用するのか、実際の課題解決や地域貢献につなげる視点が大切だと考えています。 三つ目は、「知識と創造のバランス」です。最近は創造性が重視されていますが、一方で新しいものを創り出すためには基礎となる知識も不可欠です。知識の習得と創造的な活動の双方をどう結びつけていくかが重要です。 そして最後に、「フォアキャスティング」と「バックキャスティング」という考え方です。 フォアキャスティングは、現在の状況を基に将来を予測する考え方です。一方、バックキャスティングは、将来実現したい姿を描き、そこから逆算して今何を学び、何を身に付けるべきかを考える方法です。 キャリア教育においても、子どもたちが将来の姿を描きながら、逆算して今の学びを考えるという視点は大切なのではないかと思います。 まとまりのない話になりましたが、キャリア教育について考える際の視点として共有させていただきました。以上です。
藤井座長	皆様、ありがとうございました。それぞれのお立場から、具体的な実践や経験、また課題についてお話しいただき、大変参考になりました。私自身も大変勉強になりました。 さて、ここからが本日の意見交換の時間になります。本日は 3 時 30 分

	までの予定となっておりますので、残り時間は 25 分ほどとなります。限られた時間ではありますが、できるだけ多くのご意見を伺いたいと思います。 この懇談会は全 3 回の予定ですので、本日出し切れなかったご意見については、次回以降にも引き続き議論していければと思っております。 本日のテーマは、「発達段階に応じ、効果的に体験活動を取り入れたキャリア教育を目指すために」です。 そこで、まず前半は小学校段階における体験活動について意見交換を行いたいと思います。先ほど学校現場での実践についてはご紹介いただきましたので、小学校段階ではどのような体験活動が有効だと思われるか、今後、どのような体験活動が求められると考えるか、学校だけでは難しい部分をどのように地域や企業が支援できるか、といった点について、ぜひご意見をいただければと思います。 その後、残りの時間で中学校段階について、特に職場体験学習（ナイストライ）をどのように充実させていくかという観点からご意見をいただきたいと考えております。時間配分としては、小学校段階について 10 分程度、その後、中学校段階について 10 分から 15 分程度を予定しております。それでは、まず小学校段階における体験活動について、ご意見のある方からお願いいたします。どなたからでも結構です。よろしくお願いいたします。
松本　様	私も小学校の教員をしておりましたので、その経験を踏まえて少しお話しさせていただきます。今振り返ると、深く反省していることがあります。それは、体験活動を実施すること自体が目的になってしまい、「活動はあったが学びがなかった」という状況を生み出していたのではないかということです。 例えば、地域探検やまち歩きなどの体験活動を行うことがありますが、私たち教員の間でもよく議論になっていたのは、「楽しかった」「面白かった」で終わってしまうことの課題でした。 子どもたちは確かに楽しんでいます。しかし、その体験がその後の学びにどのようにつながったのか、何を学んだのか、次にどのような成長につながったのかということを十分に検証できていなかったように思います。 先ほど小学校や中学校の先生方からもお話がありましたが、体験活動は単独で存在するものではなく、学習全体の中でどのように位置付けられるのかが重要です。その体験が、どのような系統性の中にあるのか。また、社会科や総合的な学習の時間、道徳、あるいは日常の学校生活とどのように

	つながっているのか。そうしたことを体系的に捉えながら実践していくことが必要なのだと思います。 しかし、私自身が現場にいた頃を振り返ると、そこまで十分にできていたとは言えませんでした。結果として、「体験活動をしました」「子どもたちは楽しみました」「よかったですね」というところで終わってしまい、その学びを次にどうつなげるかという部分が弱かったように思います。 ですから、これからのキャリア教育を考える上では、どのような体験を行うかだけでなく、その体験をどのように振り返り、どのような学びにつなげていくのかという視点が非常に重要ではないかと感じています。まずは、その点を共有させていただきたいと思います。
藤井座長	ありがとうございました。今のお話を伺いながら、私自身も改めて考えさせられたところがありました。 本日のテーマは「発達段階に応じた効果的な体験活動」ということですが、そもそもここで言う「体験活動」をどのように捉えるのかについて、私たち自身がもう一度丁寧に考える必要があるのではないかと感じました。 先ほど宮村委員や川上委員から、幼児期や小学校段階の実践についてお話を伺いました。また、白石委員からも、子どもたちの経験をどのように意味付けていくかというお話がありました。 そうしたお話を聞いていて思ったのは、「職業体験」や「〇〇体験」といった特別な活動だけを体験活動として捉えてしまうと、とてももったいないのではないかということです。 幼児期や小学校段階においては、日々の生活そのものが体験の連続です。子どもたちは毎日の学校生活や家庭生活、地域での活動の中でさまざまな経験を積み重ねています。 その一つ一つの経験に対して、大人がどのように意味付けをしたり、価値付けをしたりしていくのかということの方が、むしろ重要なのではないかと感じました。 何か特別な体験活動を実施すること自体が目的になるのではなく、子どもたちの日常の経験を丁寧に捉え、それを学びや成長につなげていくことが大切なのだろうと思います。そういう意味では、「体験ありき」ではなく、「体験をどう学びにつなげるか」という視点が重要なのではないかと、改めて感じたところでした。 それでは、小学校段階における体験活動について、ほかにご意見がございましたらお願いいたします。どなたからでも結構です。

村上　様	小学校段階での体験活動ということで考えると、私は読み聞かせも非常に有効な体験の一つではないかと思っています。 私自身、低学年から高学年まで読み聞かせに関わる機会がありましたが、仕事や職業が登場する話、あるいは誰かの役に立つことをテーマにした物語は、子どもたちの反応がとても良いと感じています。 読み聞かせの際には何冊か本を持っていって、「どれを読みたい？」と子どもたちに選んでもらうことがあります。すると、子どもたちは知っているキャラクターや見た目が魅力的な本に興味を示すのですが、「こんなお話だよ」と少し内容を紹介すると、意外とそちらを選ぶこともあります。 小学生の段階では、格好よさや憧れに関心を持つ時期でもあります。そのため、さまざまな仕事や経験をしている人が登場する物語を通して、子どもたちは多くのことを感じ取っているように思います。 高学年になると、単純に見た目やキャラクターだけではなく、少し考えさせられる内容の物語にも興味を持つようになります。授業として学ぶというよりも、物語の中で自然に社会や仕事について考えるきっかけが生まれるのではないかと感じています。 例えば、レモンを使ってレモネードを作り、それを販売してお金を得るという内容の話があります。そうした話を読むと、子どもたちは「自分もレモネードを作って売ってみたい」と言い始めます。 すると、「レモンは 1 個いくらぐらいするのだろう」「今はレモンの値段が高いらしいよ」「いくらで売ったらよいのだろう」といった会話が自然に始まります。 このように、物語をきっかけとして、仕事やお金、社会の仕組みへの関心が広がっていく場面を実際に見てきました。 キャリア教育というと、どうしても職業体験や特別な活動をイメージしがちですが、まずは子どもたちが社会や仕事に興味を持つことが大切だと思います。 その意味では、読み聞かせのような日常的な活動から入っていくことは、小学校段階のキャリア教育として十分活用できるのではないかと感じています。
藤井座長	ありがとうございます。いかがでしょうか。今のお話を受けて、学校現場の先生方から何かご意見はありませんか。
白石　様	確かに、先ほど松本さんがおっしゃったように、「体験をして終わりではいけない」ということは、そのとおりだと思います。一方で、キャリア教

	育が大切だということは十分理解しているのですが、学校現場の実情を考えると、それだけを優先して取り組める状況ではないのではないかとも感じています。 私自身、元教員という立場から見ても、学校にはキャリア教育以外にも優先して対応しなければならない課題がたくさんあります。 日々の授業はもちろんのこと、給食指導や生徒指導、保護者対応などがあります。また、学力に関する課題があればその対応も必要ですし、さまざまな教育課題への取組も求められます。そうした中で、キャリア教育も必要だからと次々に新しい取組を積み上げていくと、現場はますます厳しくなってしまいます。 実際には、何かを新しく行うのであれば、その分何かを整理したり見直したりする必要がありますし、教職員の時間や人的資源にも限界があります。また、教員の負担が増え続けることによって、教職の魅力そのものが低下し、教員志望者の減少にもつながりかねないという課題もあると思います。 ですから、先ほどからお話に出ている「意味付け」や「位置付け」は非常に大切だと思うのですが、それをどのように現場の負担を増やさずに実現していくのか、そのあたりの考え方をぜひお聞きしたいと思っています。
宮村　様	確かに、現場はとても忙しく、さまざまな教育課題への対応が求められています。新しい取組も次々と入ってきます。ただ、実際の学校現場では、「今からキャリア教育の学習をします」という形で取り組むことは、ほとんどないのではないかと思います。 例えば本校では、ヤギを飼育しています。 一見すると、これは単なる飼育活動のように見えるかもしれません。しかし、どのような視点から捉えるかによって、学びの意味は大きく変わってきます。 キャリア教育の視点から見れば、子どもたちは命を預かる経験を通して、獣医師や畜産関係の仕事をされている方など、命に関わる職業に気付くことができます。 また、環境教育の視点から見れば、動物と自然との関わりや環境について考えるきっかけになります。さらに、ヤギのふんをどのように活用するかといった学習にもつながります。 このように、一つの活動でも切り口によってさまざまな学びにつながります。

	そのため、一つ一つを別々の教育として区切るのではなく、子どもたちの生活全体を一つの学びとして捉えていくことが大切だと思っています。 そもそも子どもの生活は、教科ごとに分かれて存在しているわけではありません。国語、算数、社会も本来は互いにつながっています。教員は、その学びをどう結び付け、どう意味付けていくかを考えながらマネジメントしています。 ですから、「これもやらなければならない」「あれもやらなければならない」と個別に増やしていくのではなく、既にある学習や活動を統合しながら見ていくことが重要なのだと思います。 一方で、それを実現することこそが教員の専門性であり、難しさでもあります。もしその視点がなければ、「これもしなければならない」「あれもしなければならない」となってしまい、現場の負担はさらに大きくなってしまうと思います。 また、体験活動について一言申し上げると、小学校段階では子どもたちにさまざまな仕事や生き方を知ってほしいという思いはありますが、あまりにも自分の生活からかけ離れたものであると、なかなか実感として残らないことがあります。 小さい子どもたちは、ヒーローのような職業に憧れたり、「すごいな」と思ったりすることはあります。しかし、それが自分自身の生活と結び付かなければ、学びとしてはなかなか定着しません。 そのため、小学校段階ではまず、自分たちの身近な生活の中にある仕事や役割、人との関わりに気付けるような体験が大切だと思っています。 そして、その体験が「自分だったらどうだろう」「自分はどんなことができるだろう」という問いにつながっていくことが、キャリア教育の第一歩ではないかと考えています。
川上　様	１学期の学校の状況を考えますと、まず何よりも大事なのは「命を守る」ということです。特に近年は暑さが厳しく、熱中症対策が大きな課題となっています。 また、６月頃になってくると、子どもたちも学校生活に慣れてきて、お互いの距離感が近くなります。その中で、「ここまで言っていいのかな」「ここまでやっていいのかな」という感覚が少しずつ緩み、場合によってはいじめにつながるような事案も出てくる可能性があります。 そのため、教職員は子どもたちの話を丁寧に聞くことを大切にしています。休憩時間は確保されていますが、実際には昼休みなども活用しながら、子ども一人一人の話を聞き、状況を把握しています。

	また、子ども同士のトラブルや人間関係の課題についても丁寧に対応し、必要に応じて放課後には保護者へ連絡を行うなど、時間をかけて対応しています。 しかし、それも決して無駄な時間ではありません。子どもたちは、人と関わる中でぶつかったり悩んだりしながら成長していきます。その経験そのものが学びであり、人との関わり方や社会性を身に付ける大切な機会だと考えています。 そう考えると、キャリア教育も決して特別なものではありません。学校には、キャリア教育、人権教育、環境教育、福祉教育など、本当にさまざまな教育があります。しかし、「今日はキャリア教育をします」「今日は人権教育をします」と切り分けて行うものばかりではないと思っています。 大切なのは、教員自身が「この活動にはキャリア教育の視点がある」「この学習には人権教育の視点がある」「この場面には道徳教育の視点がある」と理解しながら教育活動を行うことです。 例えば、国語の学習の中にもキャリア教育につながる視点がありますし、道徳や特別活動の中にもあります。教員がそうした視点を意識しながら子どもたちの学びをつないでいくことで、一つ一つの活動に意味や価値が生まれます。そのような意識がなければ、活動は単なる経験で終わってしまいます。 先ほどから申し上げているように、活動そのものよりも、その活動をどう価値付けし、どのような学びとして子どもたちに返していくのかが重要だと思っています。 キャリア教育もまた、そのような日々の教育活動の中で育まれていくものではないかと考えています。以上です。
濱田　様	中学校になるとさらに複雑になります。子どもたち自身も非常に忙しい状況にあります。授業だけではなく、部活動もあります。例えば、放課後に何か活動を行う場合でも、その時間に部活動が入っていれば、担当教員と部活動顧問の間で調整が必要になります。 そのようなことが起きないよう、教職員間で十分に情報共有をしておく必要がありますし、場合によっては家庭への説明やフォローも必要になります。そうした配慮をしながら教育活動を進めているのが現状です。 先ほどから話題になっていますが、学校には「やった方がよい教育」が本当にたくさんあります。キャリア教育もそうですし、人権教育、福祉教育、環境教育、金融教育など、どれも大切です。子どもたちのためを思えば、本当はもっといろいろなことを経験させてあげたいという思いがありま

	す。 しかし、現実には限られた時間の中でどのように整理し、どのように教育課程の中に位置付けていくのかということを考えなければなりません。 また、「この活動はキャリア教育につながる」という視点を持つことは大切ですが、どのように意味付けるかは教員によっても違いがあります。 そう考えると、子どもたちだけでなく、教職員自身もキャリア教育について学び続けていく必要があるのだと思います。 ただ、その教職員研修や学びの時間を確保することも、現実にはなかなか難しい状況があります。正直に申し上げると、現場としては本当に大変です。 それでも、子どもたちのために必要なことをどう整理していくのか、どのような考え方で優先順位を付けていくのか、そういったことをこの懇談会で共有しながら考えていけるとありがたいと思っています。 また、学校現場が活用しやすい仕組みや支援体制が整い、「こういう場合はここに相談すればよい」「このような支援が受けられる」といったものが明確になれば、学校としても取り組みやすくなるのではないかと感じています。以上です。
藤井座長	ありがとうございました。先ほど桜山中学校の濱田委員から、中学校段階における現状や課題についてお話をいただきましたので、もしよろしければ、ここからは中学校段階での職場体験学習、いわゆる「ナイストライ」について、ご意見やご提案をいただいてもよいかなと思っています。 一方で、先ほどまでの小学校段階の議論について、もう少し深めたいということであれば、それも大変重要なことだと思います。 本日のお話を伺っていて、幼児期から小学校段階にかけての体験活動そのものの捉え方や、その体験をどのように意味付け、学びにつなげていくかということは、キャリア教育を考える上で非常に大切な視点であると感じています。 残り時間は限られておりますが、ぜひご意見をいただければと思います。いかがでしょうか。どなたからでもお願いします。
小野　様	小学校だから、中学校だからと区切って考えるものではないのかもしれませんが、少し思うところをお話ししたいと思います。 言葉の選び方が難しいのですが、先ほどから皆さんのお話の中にもあったように、「失敗してもいい」「子どもが主役」といった言葉はよく使われます。

	ただ一方で、子どもたちに失敗させたくない環境や、「楽しかったね」「よかったね」と言われることを求める環境が、時として学びの機会を狭めていることもあるのではないかと感じています。 私はテレビ局でイベントの企画や運営に携わっています。例えば、テレビ局のイベントやお祭りなどでは、来場した子どもたちが最初から最後まで楽しむことが成功の基準になることが少なくありません。「面白かった」「楽しかった」と言ってもらえれば成功という考え方です。 もちろん、それが悪いことだとは思いません。ただ、学校と連携して企画を考える際には、単に楽しませるだけではなく、真剣に考える場面をつくることや、場合によっては一度悩ませたり、失敗させたりすることも必要ではないかと感じています。 重要なのは、そのような体験を設計し、支える大人がいることです。もちろん、失敗したまま終わらせてはいけません。失敗のあとに工夫があり、その工夫を通して成功に近づいていく。その一連の過程まで含めて体験として設計されていれば、大きな学びにつながるのではないかと思います。 私たちはつい、「成功か失敗か」と考えてしまいがちです。しかし、本来、失敗と成功は対立するものではなく、同じ成長の過程の中にあるものだと思っています。失敗するから気付くことがある。気付くから工夫する。工夫するから成功に近づいていく。 そう考えると、失敗と成功は連続した一つの学びのプロセスだと言えるのではないでしょうか。 むしろ、その反対にあるのは「何もしないこと」だと思います。子どもたちに必要なのは、失敗しないことではなく、挑戦することだと思います。そして、「失敗しても大丈夫。その経験が次につながる」ということを大人がきちんと伝えていくことが大切ではないでしょうか。 キッザニアのような体験型プログラムでも、あえて一度悩んだり失敗したりする場面が設計されていることが面白いと思いました。
藤井座長	ありがとうございました。残り時間が 3 分ぐらいですので、あとお一人ぐらいあのご意見いただく時間があるかなと思いますが、いかがでしょうか。
小薗　様	少しこれまでの議論とは異なる視点になるかもしれませんが、私自身は、学校の中で行われているさまざまな活動そのものが、既にキャリア教育になっているのではないかと考えています。 例えば、委員会活動や係活動、生徒会活動、部活動、さらには学校行事な

	どもそうです。その中では、多くの児童生徒がそれぞれの役割を担いながら活動しています。 学校をより良くするために考えたり、人のために動いたり、自分の役割に責任を持って取り組んだりする経験を積んでいます。 また、仲間と協力することや、自分の考えを伝えること、課題を解決することなど、社会に出てからも必要となるさまざまな力を身に付けているのではないかと思います。 そう考えると、キャリア教育を特別な活動として捉えるだけではなく、学校生活そのものの中に既に多くの学びの機会が存在していると言えるのではないでしょうか。 そのそれぞれの役割を整理することで、キャリア教育全体の構造も見えやすくなるのではないかと感じました。
藤井座長	ありがとうございました。今、小薗さんがおっしゃったことは、まさにそのとおりだと思います。 私自身も、キャリア教育というと職場体験や進路指導のようなものが真っ先に思い浮かぶのですが、実際には毎日の学校教育活動そのものの中にキャリア教育の要素はたくさん含まれているのだろうと思っています。 先ほどから話題になっているように、大切なのは活動そのものではなく、その活動をどのように意味付けるのか、どのように価値付けるのかということなのだと思います。 そうした意味付けや価値付けが丁寧に行われれば、日々の学校生活の中にある経験そのものが、子どもたちにとってのキャリア形成につながっていくのではないかと感じています。 そういう意味で考えると、やはり小学校段階では、まず子どもたちの日常的な体験や経験を大切にすることが出発点として非常に重要なのだろうと思います。 また、先ほど小野さんからお話があった「失敗と成功」の関係についても、とても印象に残りました。 実は私自身、大学で卒業論文の指導をしておりますが、近々中間発表会を控えている学生の中に、なかなか準備が進んでいない学生がおりまして、今日の午前中にも「このままだと発表で苦労することになるよ」と話をしたところでした。 ただ、今のお話を伺いながら、失敗を避けることだけが大事なのではなく、その経験をどう次につなげるのかということも重要なのだなと、改めて考えさせられました。ありがとうございました。

事務局	本日は、中学校段階におけるナイストライや職場体験学習について、もう少し時間をかけて議論したいと思っておりましたが、残念ながら十分な時間を確保することができませんでした。その点につきましては、次回以降の懇談会で改めて時間を設けて議論を深めていければと思っております。 それでは、ちょうど予定の時刻となりましたので、本日の意見交換はここまでとさせていただきます。 最後に事務局から連絡事項があるとのことですので、しばらくお待ちください。事務局へお返しいたします。 藤井座長、それから委員の皆様、本日は貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございました。それでは最後に、教育センター所長の水田よりご挨拶を申し上げます。 【所長挨拶】 それでは、以上をもちまして本日の懇談会を終了いたします。 本日は誠にありがとうございました。当初の予定時間を少し超過してしまいましたが、大変有意義な意見交換になったのではないかと考えております。 本日いただいたご意見を踏まえながら、次回以降さらに議論を深めてまいりたいと思います。お帰りの際はどうぞお気を付けてお帰りください。 本日はありがとうございました。